

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	濱 貴子
論文題目	戦前期日本における職業婦人イメージの形成と変容に関する歴史社会学的研究		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、戦前期の「職業婦人」イメージの分析を通じて、中流女性と職業をめぐるジェンダー秩序の形成と変容のプロセスを歴史社会学的なアプローチによって考察したものである。論文は、序章、第Ⅰ部 第1章～第2章、第Ⅱ部 第3章～第7章、終章の9つの章から構成されている。各章の要約は以下の通りである。</p> <p>まず序章では、本論文の意義と目的、研究方法について述べられている。従来の研究では、国勢調査や高等女学校卒業者の就職状況などを基にした職業婦人の実態調査はあるものの、それらの変化や地域間の差異については十分に検討されていないこと、また大正後期から昭和戦前期の職業婦人イメージの形成過程についてはあまり研究されてこなかったことを踏まえ、「職業婦人」についての計量的分析および言説分析の両面からその形成過程を明らかにすることが目的として示されている。</p> <p>第Ⅰ部 (第1章および第2章) では、戦前期に行われた各種統計調査の結果から、「職業婦人」の置かれた状況とその変化を計量的な視点から分析・考察している。</p> <p>第1章では、国勢調査をもとに戦前期の女性労働全体における職業婦人の位置づけとその変化を分析するとともに、東京における職業婦人に関する調査 (4調査) を比較・検討している。</p> <p>第2章では、戦前期における高等女学校卒業生の就職動向について、3時点のデータをもとに分析し、1930年から1938年にかけて都市部を中心に就職率が高まり、女学校卒業者の「職業婦人化」が進んだことが明らかにされている。</p> <p>第Ⅱ部 (第3章から第7章) では、戦前期に発行された婦人雑誌や新聞における「職業婦人」イメージをめぐる言説を分析し、その形成と変容について考察している。</p> <p>第3章では、『婦人公論』『主婦之友』『婦人倶楽部』の3誌における女性の職業の登場頻度と記事ジャンルを分析し、3誌に共通した典型的な職業婦人の職業を抽出している。</p> <p>第4章では、『婦人公論』の手記・レポートおよび「論説」記事における職業婦人イメージについて分析している。手記・レポートでは「たしなみ系職業」が「成功」する職業婦人として描かれる場合が多いこと、「論説」記事では、職業婦人イメージが、時期変化とともに「未来の良妻賢母」として描かれるようになったことが指摘されている。</p>			

第5章では、『主婦之友』を対象として、同じく手記・レポートの成功記事の分析および論説における職業婦人イメージについて検討している。ここでは、「内職・副業」が「成功」として描かれる傾向があること、職業婦人一般に「成功」よりも「暴露」記事の方が多くいることなどが指摘されている。

第6章では、『婦人倶楽部』における手記・レポートおよび論説について分析・検討している。「成功」する職業婦人として、「たしなみ系職業」に加えて「専門・技術系職業」とくに美容師がよく取り上げられていること、論説においては、時期変化とともに「社会的自立」をめざす存在から、徐々に「職場での良縁」が強調されるようになったことが指摘されている。

第7章では、1930年代の『読売新聞』誌上における「悩める女性へ」というコーナーを対象として、その中に登場する「職業婦人の悩み」とそれへの回答を分析している。相談者は20代未婚の事務・サービス職の女性が中心であり、悩みの種類としては「恋愛・結婚」をめぐる問題がその大半を占めることなどから、職業的な展望よりも恋愛や結婚といった問題に関心を向けさせることになったと論じている。

終章では、各章の論点をまとめ、職業婦人をめぐる実態と言説の変化とそれに伴うジェンダー秩序の形成について考察している。職業婦人のイメージが、公領域（政治・経済領域）から私領域（家庭領域）へと相対的に包摂されていったこと、また職業婦人イメージが良妻賢母に包摂されることによって、女性の職場進出のハードルを下げると同時に、職業アスピレーションを「冷却」することにもなったことが、結論として提示されている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、戦前期における「職業婦人」イメージの形成と変容について、その実態および言説の分析を通して歴史社会的な視点から考察したものである。

1920年代から1940年代にかけて、職業を持つ女性の数は一貫して増加し、それに伴って「職業婦人」という呼び方も一般化していったが、その実態や社会的位置づけ等の全体像は十分に明らかにされていない。

本論文は、戦前期の職業婦人の実態とイメージについて、各種統計調査を用いた分析と、婦人雑誌や新聞の言説分析の両面から検討・考察することによって、トータルにその像を明らかにしようとした意欲的な研究である。

本論文の第一の意義は、国勢調査や職業婦人調査、高等女学校卒業者の就職状況などの各種データを集約・分類し、綿密な分析・考察を行なった点にある。職業婦人の都市部における増加と高等女学校卒業者の就職率の高まりの関係など、職業婦人の特徴や変化について重要な指摘がなされている。これまで部分的に取り上げられることが多かった戦前期の職業婦人の実態について、具体的かつ全体的に把握する上で貴重な基盤となるものである。

本論文の中心をなす第Ⅱ部第3章から第6章においては、職業婦人のイメージとその変化について、戦前期の代表的な婦人雑誌である『婦人公論』『主婦之友』『婦人倶楽部』の3誌を用いて記事内容の分析・考察を行なっている。本論文の第二の意義は、これら3誌において職業婦人がどのように取り上げられているかについて、「手記」「レポート」「論説」などの記事を手がかりに「成功」する職業婦人、あるべき職業婦人、批判される職業婦人などの視点から綿密な分析を行ったことである。3誌で取り上げられる婦人職業やそれに対する評価や眼差しにおける共通性や違いを分析し、時期変化に対応して「職業婦人」と「主婦」の関係が補完的なものとしてとらえられるようになったという指摘は重要である。また、第7章における『読売新聞』の悩み相談(「悩める女性へ」)コーナーの分析では、職業婦人の悩みや関心が職業生活そのものよりも「恋愛・結婚」に集中していることに注目した興味深い考察を行っている。

本論文の第三の意義は、これらの分析に基づいて、戦前期における職業婦人の社会的位置とその意味について社会的な視点から説得的に論じている点である。職業婦人を、公領域(政治・経済領域)と私領域(家庭領域)に交差するところに位置づけられる存在ととらえた上で、職業婦人イメージが主に公領域から私領域へとその包含関係が変化してきたこと、またそれに対応して、職業婦人イメージが良妻賢母(イデオロギー)のなかに包摂されていったという結論は、従来の研究にはないオリジナルな知見である。これらを総合して、本論文は、戦前期の職業婦人の分

析と考察を通して、女性の職業への包摂と排除のメカニズムを明らかにしようとした研究として高く評価することができる。

しかしながら、本論文について課題がないわけではない。職業婦人の実態調査における職種による分類の有効性と限界、婦人雑誌の時期区分や主要読者層についてより詳細な検討が必要であること、また論文前半の職業婦人の実態調査による知見と後半の言説分析から導き出された知見との対応について、さらに吟味・考察し知見を総合することが望まれること、本論文の知見を女性の近代化へと一般化する論理にやや飛躍があることなどが、審査において課題として挙げられた。

ただし、これらは本論文のなかで導き出された知見をさらに発展させるための期待を伴った課題であり、博士学位論文としての本研究の価値を減ずるものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものとして認める。また、令和元年12月16日、論文内容とそれに関連した事項について諮問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規定第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、著作として刊行が予定されているので、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： _____ 年 _____ 月 _____ 日以降